

ずうっと、ずっと、大すきだよ

愛知サークル 半田市立亀崎小学校 由井みどり

中心人物：ぼく

## 1 場面分けとラベリング・問題づくり

### 【一場面】①②

「ぼくが、エルフのことを話します。という話」

- ・エルフのことって、どんなことか。
- ・世界でいちばんすばらしい犬ってだれが、決めたのか。どうして、言い切れるのか。

### 【二場面】③～⑤

「ぼくたちはいっしょに大きくなった話」

- ・いっしょに大きくなったとは、いっしょに何をしたのか。  
一緒に遊ぶ。一緒にトイレに行く。誕生日を過ごす。寝る。夢を見る。いつも一緒。
- ・いっしょに大きくなったといっているのに、どうしてエルフのほうがずっと早く大きくなったのか。

犬は2歳で人間の成人となり、その後1年で7つ年をとると言われる。

- ・⑤の「でも」の、前件と後件の内容が違う。「にいさんやいもうともエルフのことが大すきだった。」とあるから、ふつうなら「でも、ぼくの方がもっと大すきだった。」というべきところを「でも、エルフはぼくの犬だったんだ。」と言っているのがおかしい。どういうことか。

### 【三場面】⑥～⑨

「エルフとぼくは、まい日いっしょにあそんだが、エルフのことをだれも好きと言ってやらなかった話」

- ・自分の家族は、エルフが悪さをすると、すごくおこった。ふつう怒ったら、きらいになるのにエルフのこと大好きだったというのが変だ。
- ・「すきならすきと言ってやればよかったのに、だれもいって行ってやらなかった。」とあるが、ぼくは、好きと言ってやっていたか、言っていないか。

好きと言ってやっていた。「うちの家族は、みんなは」と、自分と家族を切り離し取り立てているので、ぼくを除いて自分の家族のみんなは好きと言ってやらなかったが、ぼくは言ってやったというのが隠れている。

- ・「いわなくっても、わかると思っていただね。」とは、どういうことか。言わなくてもわかるのか、わからないのか。

言わなくては分からないのにね。という気持ちが隠れている。だから、ぼくは毎晩好きと言ってやっているんだと。

- ・うちのかぞく：うち（その人の家（の人）の家族（同じ家に住む夫婦・親子・兄弟など）  
この場合、父・母・兄・妹・・・みんな

### 【四場面】⑩～⑭

「エルフがとしをとり、かいだんも上れなくなったが、ぼくはねるまえにはかならず「エルフ、ずうっと、大すきだよ。」って言ってやった話」

- ・獣医さんにもできることは何もないとはどういうことか。
- ・かいだんも上れないってどういうことか。他にどんなことができないのか。

あったかいおなかをまくらにすること、いっしょにゆめをみること、りすをおいかけることや、ママの花だんをほりかえすこと・・・

- ・ エルフはかいだんも上れなくなったのに、ぼくのへやでねなくちゃいけないんだ。って変だ。何をするために、ぼくのへやでねかせるのか。

いつ死ぬか分からないエルフに、今でも途切れることなくずっと好きだと分かってもらうため。

- ・ ⑭ぼくは、エルフに何を分かってほしいのか。

#### 【五場面】⑮～⑰

「エルフが夜の間に死んだが、ぼくはいくらかきもちがらくだった話」

- ・ 「ぼくだって、かなしくってたまらなかったけど、いくらかきもちがらくだった。」とは、どういうことか。

妹や兄さんだけでなくぼくも悲しみは抑えようとしても抑えられないほど悲しい。でも、毎晩、エルフにずうっと、大すきだよと言ってやっていたから、少しは精神的に安らかではあった。

#### 【六場面】⑱～⑳

「ぼくは、いつか何を飼っても、毎晩「ずうっと、ずっと、大好きだよ。」って言ってやろうと思う話

- ・ ⑱隣の子が、子犬をくれるといったとき、なぜぼくはいらないって言ったのか。
- ・ 大好きなエルフのバスケットをどうして隣の子にあげたのか。
- ・ どうして、何を飼っても毎晩きつと「ずうっと、ずっと、大好きだよ。」って言ってやろうと思うのか。

## 2 解釈

エルフのこと、生まれたときから生きている間、そして死んだときのことまで全部話す。自分の知っている中で、エルフは最高の犬だ。

ぼくとエルフは、体や心も一緒に成長していったが、犬のエルフの方が大人になるのがずっと早かった。ぼくは、どんなときもエルフの気持ちがいいおなかをまくらにするのが気に入っていて、一緒に眠りについた。エルフは僕の犬だったから、兄さんや妹とはいっしょに寝なかった。

エルフと僕は毎日どんな日も同じことをして遊んだ。エルフのお気に入りの遊びは、りすを追いかけてりママの花壇を掘り返したりすることで、その迷惑な悪さをパパ、ママや、兄さんなどの家族は強い言葉でエルフをしかった。でも、しかっているけれども、家族のみんなはエルフのことが大好きだった。好きなら好きと言ってやればよかったのに、ぼく以外は家族のだれも好きと言ってやらなかったのが残念だ。言わなくても分かって思っていたから好きって言ってやらなかったね。でも、言葉にして言わなければ分からないものだと思う。だから、ぼくだけは好きだよと言ってやっていた。

いつの間にか時がたち、成長の遅いぼくの背がぐんぐん伸びる間に、成長の早かったエルフはどんどん太っていった。エルフは年をとって、以前は僕と毎日いっしょに遊んだのに、寝ていることが多くなり、りすを追いかけるのが好きだったのに、散歩を嫌がるようになった。僕は病気ではないかととても心配した。獣医さんに連れて行っただが、獣医さんでさえもはやできることは一つもなかった。なぜなら、「エルフはとしをとったんだよ。」の獣医さんの言葉の通り、生きているものには寿命があり、それはお医者さんでも元の健康な体に治すことはできない自然の摂理なのである。獣医さんの所に行ってほどなく、エルフは階段さえも上れなくなった。かなりの末期症状であ

る。いつ死んでもおかしくないくらいの様子なのだ。階段を上れないからと言って、1階にひとりで置いておくわけにはいかない。「エルフは、ぼくのへやでねなくちゃいけない。」と言って部屋に連れていく目的は、以前はエルフのあったかいおなかをまくらにしていたぼくが、今度はエルフのためにやわらかいまくらをあてがってやり、寝る前には必ず「エルフ、ずうっと、大すきだよ。」って言ってやるためだった。太って、以前のように一緒に遊べなくても、ぼくは、前からも、これからもずうっと大好きだよと言ってやり、僕には愛されているとエルフに分かってほしかったのだ。うちの家族は叱るだけ叱って、好きでも好きと言ってやらなかったけど、僕だけはずうっと大好きだよと言い続けてやるよと。

ある朝、僕が目覚めた時にエルフは死んでいた。エルフは夜の間死んだのだ。ぼくたちはみんな泣いた。ぼくだって今までずうっと一緒に育ってきたエルフがいなくなってしまったことは悲しくてたまらなかったけど、毎晩一日も欠かさずエルフに「ずうっと、大すきだよ。」って言ってやっていたから、精いっぱい愛を伝えていた分、エルフに愛が伝わっていたと思える分、少しは心が安らかだった。

隣の子が子犬をくれると言った。ぼくがそれを断ったのは、まだ今は子犬を飼う気になれなかったからだ。エルフはぼくが新しい子犬を飼うことにやきもちをやいたりすることはないと分かっていたけど、そんなにすぐに次の犬を好きにはなれない。今はエルフのことを思っていたい。だから、子犬をもらう代わりに、ぼくがエルフのバスケットを隣の子にあげた。その子の方が、バスケットが必要になると思ったから。

いつかそのうち、ぼくも隣の子のように他の犬を飼うようになるだろうし犬だけでなく子猫や金魚も飼うだろう。何を飼うことになったとしても、そのときは毎晩必ず「ずうっと、ずうっと、大すきだよ。」って、言ってやると僕は強く思うのだった。